

弘前学院大学ティーチング・ポートフォリオ

社会福祉学部・社会福祉学科
藤岡 真之

作成日 2024年2月9日

1. 教育の責務

2005年度に弘前学院大学社会福祉学部に採用され、現在に至る。
社会学および社会調査に関わる科目を中心に、講義・演習・実習科目を担当している。
2014年度より、社会福祉学研究科での業務を兼務している。
また、合同学務委員会、合同教職委員会の委員として、学生の教育に関わる業務に携わっている。

2023年度担当授業

科目名	学年	授業種別	開講学期	概要
社会学A	1年	講義	前期	社会学全般
社会学B	1年	講義	後期	社会学全般
社会福祉調査法	2年	講義	後期	社会福祉調査の方法
社会福祉調査実習A	3年	実習	前期	社会福祉調査の企画・実施・分析
社会福祉調査実習B	3年	実習	後期	社会福祉調査の企画・実施・分析
社会科学的研究方法	2年	講義	前期	社会科学的な研究の方法
人間科学概論	1年	講義	前期	社会変動、社会関係、社会意識
社会福祉学特講A	1年	講義	集中	地域課題についての学習
基礎演習Ⅱ	2年	演習	通年	社会学およびその近接分野の文献の講読
専門演習Ⅰ	3年	演習	通年	社会学およびその近接分野の文献の講読、論文の作成指導（調査の実施に関わる指導も含む）
専門演習Ⅱ	4年	論文指導	通年	論文の作成指導（調査の実施に関わる指導も含む）
現代の社会と文化A	1年	講義	前期	メディア論、消費社会論
現代の社会と文化B	1年	講義	後期	社会学全般
社会学	1年	講義	後期	社会学全般
社会科学的研究法特論	院1年	講義	前期	社会科学的な研究の方法
人間福祉演習Ⅳ	院2年	論文指導	通年	論文の作成指導

2. 教育の理念

社会学は、現代社会の成り立ちに強い関心を持つ学問領域である。したがって、学生には、現在起こっている社会的な出来事について関心を持ち、その背景について考えを深めてもらいたいと思っている。こうした観点に基づき、授業では、具体的かつ現代的な社会現象を例として取り上げることが多い。とはいえ、具体的な社会現象についての知識を得れば、社会現象を十分に理解したことになるわけではない。具体的な社会現象を、抽象的な概念と結びつけて考えられるようになることが、社会を深く理解することにつながる。そのため、抽象的な概念を理解し、抽象的思考力を向上させることも重要である。

だが、他方で、抽象的な概念のみによって、具体的な社会現象を理解することはできない。そこで重要になるのが、データを元に社会を理解するということである。この、社会に関わるデータを適切に収集する方法についての知識の体系が、社会調査法である。学生には、社会調査に関わる知識を修得するとともに、具体的なデータ、根拠を元に、社会現象を捉えられるようになってもらいたいと考えている。

つまり、学生には、抽象と具象を往復することを通じて、立体的に社会を捉えられるようになってもらいたいと考えている。

学びを進めていくにあたっては、学習者の内発的な動機が重要であると考えている。以上に述べた、具体的かつ現代的な社会現象を多く取り上げることや、具体的なデータを収集することについての学びは、そうした動機の涵養に資すると考えている。

3. 教育の方法

上で、社会を抽象的に捉えることと、具体的に捉えることの両面について述べたが、それぞれの力を涵養するために、以下のことを実践している。

抽象的概念についての理解、抽象的思考力を向上させるということは、抽象的な言語の能力を高めるということである。概念や思考は、言語によって成り立つからである。この力をつけるために有効な方法は、多くの言葉を読み、多くの言葉を書くことである。

具体的な方法のひとつは、文献を読むことである。担当しているゼミ（基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅱ）では、文献の講読を行っている。文献をしっかりと読み、それについて要約を作成する（＝レジュメを作成する）ことは、抽象的な言語能力を高める方法として効果が高い。

また、「書く」ことに関しては、専門演習Ⅰと専門演習Ⅱにおいて、論文作成を行っている。多くの言葉を費やして、論理的な文章を書くことが、抽象的思考力を涵養することにつながると考えている。

他方、具体的な側面を捉えることに直接関わっているのは、社会調査に関する授業である。社会福祉調査法の授業においては、社会調査に関する基本的な知識を学び、社会福祉調査実習においては、調査の企画、調査テーマ・仮説、調査項目を考える、調査を実施する、調査結果をまとめる、報告書を作成するといった、社会調査の一連のプロセスを学んでいる。これらの授業で身につけた知識・技術は、ゼミ論文、卒業論文の執筆に際して行われる社会調査にも役立つ。また、社会学等の授業においては、具体的な社会現象に関するデータを読む機会も多く（質的データ、量的データのいずれかを問わず）、その過程で、社会現象を具体的に捉える力が涵養されると考えている。

4. 教育の成果

学生からの声を総合すると、演習科目、実習科目は、相対的に学生の満足度が高いと感じられる。演習科目、実習科目は能動的に授業を受ける側面が多いということが大きな理由のひとつであろう。特に、論文を作成したり、調査を実施する際には、学生の関心や興味を尊重してテーマ選択を行っていることが、能動的な学びにつながっているのではないかと思う。また、ゼミで文献講読を行った後には、自分以外のゼミ生のさまざまな意見、考え方を知ることが出来て興味深かったという感想がしばしば聞かれる。これは、1人ではなく複数名で、意見交換をしながら文献を読むことの大きな効用であろう。

講義科目については、授業評価アンケートの結果は、おおむね良好である。「学生自身の自己評価」「授業担当者に対する評価」「授業内容に対する評価」という3つの質問群を比較した場合には、「学生自身の自己評価」の数値が相対的に低い傾向がある（全学平均も同様の傾向があるように思う）。「学生自身の自己評価」とはいえ、この部分についても、教員からの働きかけが影響する部分はあると考えられるので、改善の余地はあるだろう。

5. 教育の改善

演習・実習科目については、学生の関心、興味を尊重してテーマ設定を行うということ継続していきたい。とはいえ、学生の関心、興味を尊重していれば、いつでもよい学びが達成できるわけではない。深く考えることなく、知識が十分ではない事柄を、テーマとして選択すると、論文においても、調査においても、芳しい結果を出すことは難しいからである。したがって、教員の立場としては、学生の関心、興味を尊重しつつも、より深い知識、より広い見地に基づいて、テーマ設定の適切性についてのアドバイスができるよう、努力していきたい。

次に講義科目に関して。授業評価アンケートの「学生自身の自己評価」に関する項目のうち、相対的に数値が低いのは、予習・復習に関する項目である。これは、授業時間外の学習時間が必ずしも多くないことを意味している。これまで小テストを行うことで復習を促してきたが、今後は、社会観察や小レポートの課題を考えていきたい。

また、授業における視覚的資料の活用についても述べておきたい。講義科目においては、これまでも画像、映像を使用してきたおり、これに関わるアンケート項目の数値も悪くない。だが、視覚的資料をさらに充実させることで、学生の学びも高まると思われる。今後改善していきたい。

6. 教育の目標

学生には、大学での学びにおいて、自らの頭を使って思考する力を伸ばしてもらいたいと思っている。現在の社会は変化のスピードが速く、今後も社会は変化し続けていくであろう。このような環境にあっては、学生時代に柔軟な思考力を身につけることが、卒業後の職業生活、社会生活において大きな意味を持つであろうと考えている。

【資料】

1. シラバス
2. 授業評価アンケート
3. 講義資料、教材